

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト第二期について

藪田 貫

はじめに

兵庫県と徳島県が母体となる「鳴門海峡の渦潮」世界遺産登録推進協議会の下、平成二十七年（二〇一五）度に「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査会が設置され、自然的価値を兵庫県、文化的価値を徳島県が担当し、推進するという枠組みが作られ、その後、調査研究の成果が蓄積されている。

令和二年（二〇二〇）度、その枠組みが一部変更され、淡路島を対象にした調査研究プロジェクトを新たに立ち上げることとして、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室に、その任務が付託された。その経緯についてはすでに研究室紀要第六号に報じたところであるが、世界的な新型コロナ禍の下、二ヶ年の予定が三ヶ年に延長され、令和四年度でもって終了している。

年度末の令和五年二月に、報告書『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』を発刊するとともに、三月には、両県知事ら関係者出席の下で開催された「鳴門海峡の渦潮」世界遺産登録推進協議会の総会で、その要旨を発表した。それと同時に、さらに二ヶ年の予定で同プロジェクト第二期をスタートすることを提案し、了承され、現在、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト第二期が始まっている。

実施のために、ひょうご歴史研究室に調査研究プロジェクト実行委員会（実行委員長は研究室長が兼ねる）を設置し、徳島県文化資源活用課と兵庫県淡路県民局の協力の下、淡路市・洲本市・南あわじ市それぞれの教育委員会文化財課の協力を得て進めるといった態勢は、第一期と同様である。ただし第二期では、「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観」というテーマを立てたことでメンバー

については異動があった（後述）。

一、「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観

世界遺産登録推進事業との関係で、二期目の事業を「鳴門の渦潮と淡路島の文化的景観」とした
ことについて述べる。

「鳴門の渦潮」は、その自然現象から鳴門海峡に注目が集まるが、自然的価値の検討を通じて作成された水理模型（うずしお記念館で展示）に明らかのように、明石海峡と鳴門海峡の間に挟まれた淡路島の存在がなければ渦潮は生まれ得ない。その意味で、淡路島の調査研究は「鳴門の渦潮」調査研究の基本的な部分である。淡路島は、「国生みの島」として日本遺産に登録され、古代の海人（海民）が注目されるとともに、銅鐸や製鉄遺跡など、考古学上の発見が大きな関心を呼んでいる。しかし長い歴史を考える時、島の地形や環境がどのように変遷し、現在に至っているか、歴史地理的な究明が必要である。

幸い、第一期の調査研究で、徳島藩が一八二〇代から三〇年代にかけて実施した「分間絵図」^{ぶんけんえず}の存在が明らかとなり、さらにこれまで淡路島内三市においてバラバラであった認識の共有化が進むことで、「鳴門の渦潮」の世界遺産登録推進事業の資料として「分間絵図」が位置づけられるにいたった。とくに一八〇〇分の一という大縮尺は、島内の各地区の地理情報を読み取る上で最良のものである。

問題は「分間絵図」からどうした情報を読み取るかであるが、周囲を海に囲まれた島として、その変遷には、「鳴門の渦潮」を生む海流の変化、潮位の変化と地震などの影響とともに、浦や湊の形成と漁労・運搬活動、漂着物とえびす信仰、山地での植林、ため池による治水涵養、京・大阪から淡路に至る南海道の整備、といった住民たちの長期にわたる活動の跡が含まれている。それらを「分間絵図」によって、読み取ろうとするものである。

いかに縮尺が大きいとは言え分間絵図は、平面図である。立体的な地形の一つの見方に過ぎな

いが、それを補うのが、一八〇〇年頃に成立したと思われる「淡路名所図会」である。対象を名所に限定しているが鳥瞰図であり、たとえば絵図に「戎」と書かれている部分を、「名所図会」では明確に「社」として把握することができる。「図会」は兵庫県立歴史博物館が所蔵する資料で、これまで未公開であった。この機会にデジタル撮影し、画像として公開することで、調査研究のみならず広く県民が利用することが期待される。

以上が、テーマ「鳴門の渦潮と淡路島の文化的景観」の具体的な内容であるが、文化的価値として参照されるべきは世界遺産のOUVのつぎの基準である。

(v) ある文化（または複数の文化）を特徴できるような人類の伝統的集落や土地、海洋利用、あるいは人類と環境の相互作用を示す優れた例であること。

二、事業計画と体制

事情計画は、以下の四点である。

第一に、調査研究の柱である、江戸時代後期に徳島藩が作成した「分間絵図」の所在の最終確認を受けて、所蔵先である淡路三市との利用に当たったのガイドラインを作り（人権問題に関する情報を含んでいるため）。

第二に、資料の電子化にあたっては、徳川幕府が作成した「国絵図」などの撮影において優れた実績を上げている四国工業写真株式会社に対し、容量三〇〇dpiでの撮影を委託し、年度内に撮影を完了する。撮影に当たっては、調査研究メンバーの意見・希望を聞いた上で最終決定する。

第三に、「鳴門の渦潮と淡路島の文化的景観」という研究テーマに相応しいチームの編成と、そのメンバーによる調査・研究ならびに研究会の開催。

第四に、「分間絵図」の情報を、「淡路名所図会」と照合することで解読を深めるために、『図会』のデジタルデータ化と索引検索作業の実施。

その後の進捗であるが、一については、淡路三市の教育委員会並びに文化財課との調整がすべて済んでいる。二の四国工業写真による撮影は、洲本市・南あわじ市・淡路市の順で進んでおり、年度内に完了し、新年度早々にデータの引き渡しが予定されている。三についてはすでに二回の研究会を開催し、年度末の第三回研究会で中間報告が行われる。そして四のうち、臨時職員の雇用によって行われている検索作業は年度内に完了し、デジタル化については近々、業者が選定される予定で、新年度当初に着手されることとなっている。最後に第二期プロジェクトの調査研究メンバーを付記する（敬称略）。

・藪田 貫 座長（近世史・「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術検討委員会委員）

・坂江 渉 ひょうご歴史研究室研究コーディネーター（古代史）

・古市 晃 ひょうご歴史研究室客員研究員・神戸大学大学院人文学研究科教授（古代史）
・大村拓生 ひょうご歴史研究室客員研究員・

関西大学非常勤講師（中世史）

・木村修二 神戸大学大学院人文学研究科特命講師（近世地域史）

・町田 哲 鳴門教育大学大学院学校教育研究科教授（近世史）

・平井松午 徳島大学名誉教授（歴史地理学）

・金田章裕 京都府立京都学・歴史館館長（歴史地理学・「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術検討委員会委員長）

・竹内 信 ひょうご歴史研究室研究員（県立歴史博物館学芸員・近代史）